

「コミュニケーション」と ティーチング・アシスタント

沖森 卓也

全学共通カリキュラムの総合科目「コミュニケーション」は、日本語の運用能力を高める科目として設置されている。私が着任した1985年には既にこの名称で展開されており、おそらくアメリカにおける、英語の運用能力を高めるための「コミュニケーション」という科目にヒントを得たものかと思われる。

このような内容は高等学校において「国語表現」という名称で力点が置かれているのであるが、実際には受験のための学習におちいりがちで、文章を書く能力を養う授業はおざなりにされているのが実情である。それゆえ、「国語表現法」「日本語表現法」のような科目を大学において展開することが求められることにもなる。

学生個々の書く能力を高めるためには、それぞれに応じた個別的な添削指導が本来は必要である。しかし、本学の全学共通カリキュラムにおいて人数制限をしないとすれば、大人数にも対応できる授業形態をとらざるをえない。現に「コミュニケーション」の実質的な受講者は2000年の前期・後期ともに約300人前後である。他大学において、

この種の科目がどのように展開されているかは不案内であるが、実質的な効果を上げるためには、せいぜい30名が限界であろう。丁寧に指導するとなれば、それよりも更に少人数の方が好ましい。しかし、現実には大人数の授業として展開せざるをえない。その場合、作文の添削のような内容は当然扱いきれないため、しかるべき授業材料で効果を上げるように図る必要がある。

3年ほど前に半沢幹一氏と共編で『日本語表現法』（三省堂刊）という大学生向けのテキストを刊行した。これには別綴じてワークブックを付けてある。そのねらいは、各章・各節ごとの説明に対応する形で、単に講義を聞くだけでなく、実際に課題に取り組むことで、学習の効果をより高めることにある。このテキストの刊行は、本学へのティーチング・アシスタント(TA)制度の導入と、ちょうど時期を同じくした。

それ以降、受講生は各回の授業のまとめとして個々に実践的な課題に取り組む方式で授業を進めている。すなわち、ワークブックから1シートずつ切り離し、それぞれの課題に解答して提

出すというものである。ただし、その解答用紙は各回250枚以上にも及ぶ。昨年度、多い時には400枚以上にものぼることがあった。

T Aが制度的にどのような業務を遂行するのかに関しては、いろいろと議論のあるところであろう。その議論はともかく、前記のように授業を進める實際上、膨大な提出物の整理を補助してくれるT Aの存在はまことにありがたい。ただし、過大の負担をT Aの院生にかけるのも好ましくない。結局、どこかで折り合いを付けるしかない。

本来ならば、それらを一枚ずつ添削して返却したいのだが、それは私にも、そしてT Aの院生にもあまりにも負担が多すぎるのである。たとえば、仮に1枚につき1分かけるとすれば、250枚ぐらいいでも4時間以上に及ぶ。そして、それらを整理し、成績表に転記するにはさらに時間を要する。それを毎週続けるのは容易なことではない。

そこで、提出物の整理に関して、T Aには次のような業務を要請している。まず、学生番号順に提出物を整理し、こちらで用意した正答に即しておおまかに評価し、その評点を成績表に記入する。そして、今後の教材開発のための準備として、取り組んだ課題の設問が適当であったかどうかの感想をまとめるというものである。ただ、この業務を遂行するにも、実際にはかなりの時間を要する。その点で、T Aの院生には大いに感謝している。

提出物は授業の冒頭で本人に返却し、

課題の正答もしくは解答例を解説している。それによって、受講生個々が自身の言語能力を省みることができるようにと考えている。もちろん、このような方法がベストだと思っているわけではないが、大人数に対処するには今のところ、これよりほかに名案が浮かばない。

日本語の表現力を高めるには、結局のところ多くの文章を読み、多くの物事を論理的に考える訓練を繰り返すしかない。問題意識を何も持たずに、よい文章を書くことはできない。その文脈に即した適切な言葉を選べなければ、説得力のある文章は書けない。個人の自覚においてしか、表現力は高めることはできない。それでも、敬語の使い方とか、テーマの設定のしかたとか、技術的な「表現のための知恵」も習得しておく方が裨益することもある。それを解説することで、個々の表現力向上の一助になることを願っている。

T Aの院生には、このほか授業準備の補助と、学期末試験の採点補助を依頼している。採点補助は、その言葉通りで特に付け加えることはない。こちらで用意した正答と照合して、採点するのであるが、少し長い文章を書かせることもかつてはあり、大きな負担をかけたこともあった。

授業準備の補助は、課題をこちらで用意する場合のことである。だいたいはワークブックに沿う形で授業を進めるのであるが、たとえば参考文献の示し方を指導する際、その材料としてい

くつかの書物の奥書を用意するという作業を頼むこともある。

現在のような授業の進め方においてはTAの協力は欠かせない。ただし、その負担も過大にならないかと気がかりである。今後も授業自体の進め方に

は工夫を要するが、それとともにTA制度が院生自身にとってもよい経験となることを祈りたいと思う。

(おきもり たくや 本学文学部教授)